

学生寮お茶大 SCC における活動実践と成果 —2011 年と 2013 年の SCC 寮生への調査結果を比較して—

北澤泰子・望月由起

お茶の水女子大学 学生・キャリア支援センター

Activities and Accomplishment in the student dormitories, Ochanomizu University SCC compared between the research results on the dormitory students of SCC in 2011 and 2013

Yasuko KITAZAWA and Yuki MOCHIZUKI

Ochanomizu University Student and Career Support Center

This study is to compare item by item between the following two researches and report its results. One is the research (Katsura 2013) for the purpose of the comparison examination on the current living conditions and the satisfaction level for the students in the three student dormitories of Ochanomizu University in November, 2011 and the other is the research conducted for the dormitory students of Ochanomizu University SCC in March, 2013.

The principle findings are as follows. Compared with in 2011, 1) Many dormitory students obtained the information related to the dormitories at the website and from the leaflets before moving into the dormitories. 2) The awareness for the recognition of and the requests to the managing organizations of the dormitories, and for the emergency measures thereof are increased. 3) Regarding the human relations in the dormitories, the communication among the dormitory students cannot be created only by making them a room sharing type dormitory or living pursuant to the student support service programs. It is required to foster the officials of the dormitory student organization such as dormitory superintendents and sub-superintendents, and the existence of a leader such as a house leader who serve as models of dormitory students. 4) A newly built dormitory attracts attention for its novelty of the equipment (hardware). However, it's difficult to maintain the conditions at the time of the construction forever due to aging degradation, and the satisfaction level also declines. On the other hand, the educational support can be expected by enhancing the student support service programs (software) in the dormitories.

keywords : student dormitory, living environment, human relationships, degree of satisfaction, residence at dormitory

はじめに

日本の大学の学生寮は、かつて主流だった「相部屋型」から「個室型」へと変化し、さらに近年では「ルームシェア型」の学生寮も見られるなど、その機能は多様化している。このような学生寮の変化・多様化は、時代背景に伴い、学生寮に求められるものが変化しており、今日では経済的支援にあわせて、教育的支援も求められてきていることを反映している。こうしたニーズを踏まえ、お茶の水女子大学では、新たな学生寮「お茶大 SCC(Students Community Commons、以下 SCC)」を 2011 年に開寮し、既存

寮(小石川寮・国際学生宿舎)との機能分化を行った。SCC は学部 1、2 年生を対象とし、定員は 50 名、プライバシーを確保しつつ、他者との共生を通じて自主協同に必要な精神とコミュニケーション能力を培うことを目指す、教育的機能を持つ寮である。SCC の理念として、人間形成機能を担う教育寮としていくこととし、ここから「共に住まい、共に成長する学生寮」をコンセプトとした。

本稿では、2011 年 11 月にお茶の水女子大学の 3 つの学生寮の寮生を対象に、生活実態や満足度を調査して比較検討することを目的に行われた調査(桂, 2013)と、2013 年 3 月に SCC 寮生(学部 1、2



Figure1: ハウス内の様子 (居室・ハウスリビング・洗面所)

年生のみ、レジデント・アシスタントは含まれない)を対象にして行われた調査について、項目別に比較し報告する。

学生寮「お茶大 SCC」の概要

ハウス制

SCC ではコンセプトに基づいて設計を行い、5人で一つのコミュニティ「ハウス」を形成している。プライベートスペースは、あえて最低限のスペースに作られており、できるだけハウスリビングに出て過ごすことを促すように設計されている (Figure1)。ハウスは学部1年生と2年生、学部・学科が異なるように部屋割りをして、日常的な交流の中で自分の学びを人に伝える力を育て、視野を広げることを目的にしている。年度末にはハウス・居室替えを行い、よりたくさんの人の関わり合いながら生活するようにしている。

学生支援プログラム

学生同士の交流を促進させるために、ハウスを中心に様々な取り組みを行う「学生支援プログラム」を設定している。このプログラムは、他者との交流やコミュニケーションを通して、豊かな人間関係をはぐくみ、共に学び合うことを目的とするものである。

具体的には、1)寮生同士の交流を促進させるための「交流プログラム」、2)寮生自身が主体的に企画・活動し、共に学び合うための「自主企画」、3)大学とは異なる寮独自の学びの場である「学修プログラム」の三つを柱としている。

大学のサポート体制と寮生組織

大学のサポート体制は、学生支援に関わる教員と職員を中心に、教職協働の体制となっている。学生・キャリア支援センターに所属する「学寮アドバイザー」が寮生との窓口となり、学内外の関連機関と連携して、対応にあたっている (Figure3)。また、寮内管理業務は、管理会社に委託している。

4月	入寮日 新入生交流企画(1年生会)	10月	SCC寮祭
	SCCオリエンテーション・ウェルカムパーティー		次年度RA説明会
	第1回 学修プログラム 講演会	11月	第3回学修プログラム 講演会
5月	清掃ワークショップ	12月	第3回学修プログラム 発表会
	第1回 学修プログラム 発表会	1月	寮生協議会の振り返り
6月	第2回 学修プログラム 講演会	2月	SCC-RA研修
	寮生交流ワークショップ		新2年生研修(次年度役職決め)
7月	第2回 学修プログラム 発表会	3月	居室替え
	学部オープンキャンパス SCC紹介コーナー		SCC修了式・さよならパーティー
8月	他大学学生寮 視察		新2年生研修

Figure2: SCC 年間行事 (抜粋)

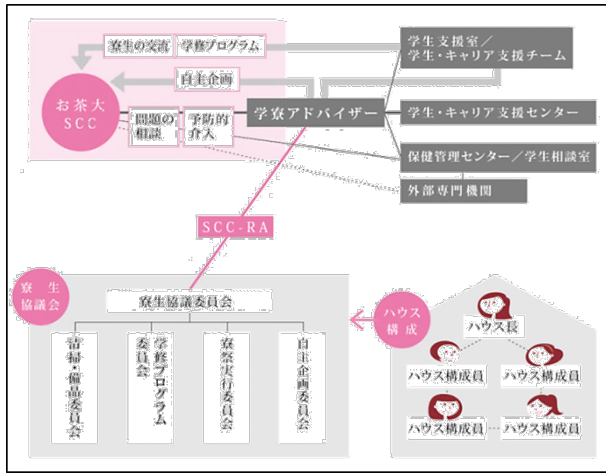


Figure3: 大学のサポート体制と寮生組織

2013 度からは「お茶大 SCC 新寮レジデント・アシスタント (SCC-RA) 制度」が新設された。2 年間 SCC に在寮経験のある、公募によって選ばれた 3 年生 4 名が寮に居住し、学寮アドバイザーと連携をとりながら 1、2 年生をサポートしている。また寮生協議委員会はハウス長で構成され、寮生は 4 つの委員会のいずれかに所属することになっている。

SCC は開寮から 4 年目を迎え、学生支援プログラムの内容及び、寮生組織の構成も年々充実を図っている。またハウス方式での寮生活では、価値観の違いから数多くの衝突があるが、それらを回避することなく他者と積極的に関わり、解決することが求められる。

調査概要

本報告は、2011 年 11 月にお茶の水女子大学の 3 つの学生寮の寮生を対象に行われた調査 (桂, 2013) と、2013 年 3 月に SCC 寮生 (学部 1、2 年生のみ、RA は含まれない) を対象にして行われた調査に基づく。有効回答数は、2011 年の調査では 26 名 (53.0%)、2013 年は 17 名 (42.5%) であった。学年別に示したものが、Figure4 である。調査方法はいずれも質問紙によるもので、入寮の動機、情報の入手方法、施設・設備への満足度、寮費や寮の規則、寮の運営機関、非常時の対応、対人関係など多岐にわたる。

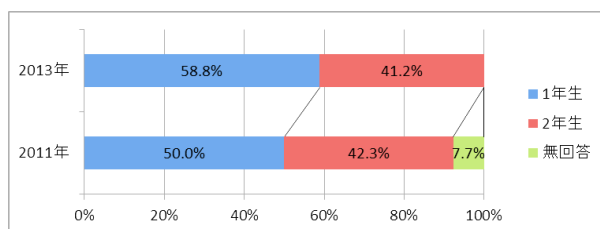


Figure4: 回答者の学年別の割合

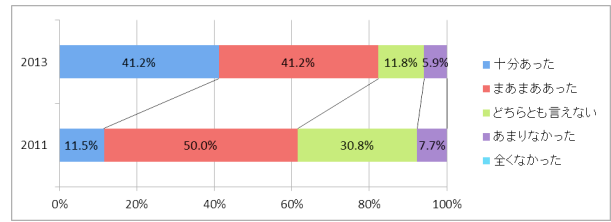


Figure5 寮に関わる諸経費

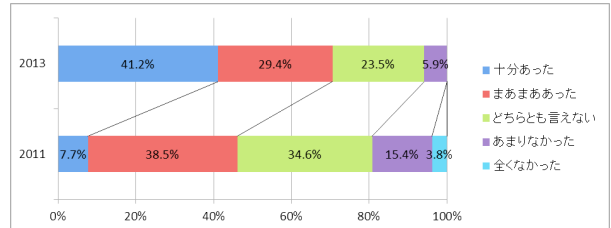


Figure6 寮の施設や設備 (共有スペースなど)

分析結果

2011 年と 2013 年に行った調査をもとに、「寮に関する情報」「施設・設備の満足度・要望」「寮費や寮の規則の認知度・満足度」「寮の運営機関の認知度・要望」「寮内での非常時の対応の認知度」「寮内の対人関係」の 6 つの項目に分け比較を行った。

寮に関する情報

入寮前に SCC の情報について、どの程度受け取っていたかを尋ねた。寮に関わる諸経費、寮の施設や設備 (共有スペースなど) については、「十分あった」「まあまああった」を合わせると、それぞれ 82.4%、70.6% という結果が示された (Figure5,6)。2011 年と比べて、それぞれ 20.9 ポイント、24.4 ポイント上昇していた。部屋の設備や家具については、52.9% と半数は認知しているが、諸経費、共有スペースに比べるとまだ多くはない (Figure7)。

寮の管理システム、寮のルールや規則については、「あまりなかった」「全くなかった」を合わせると、それぞれ 35.3%、52.9% という結果が示された (Figure8,9)。2011 年と比べて、それぞれ 18.5 ポイ

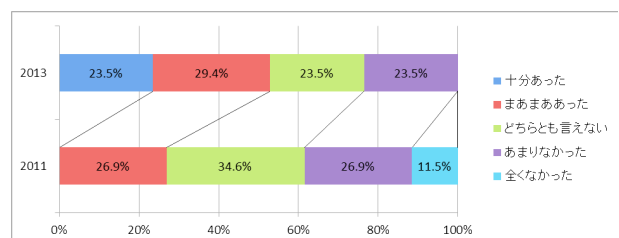


Figure7 部屋の設備や家具

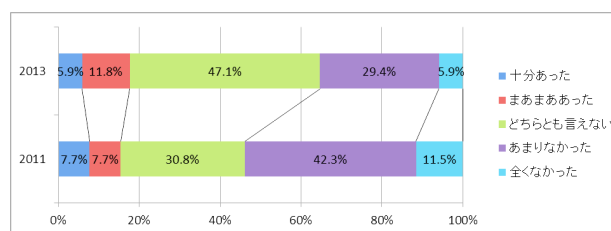


Figure8 寮の管理システム

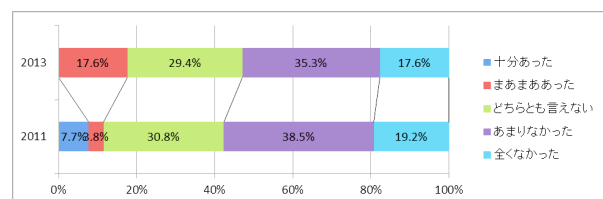


Figure9 寮のルールや規則

ント、4.8 ポイント下降していた。しかし依然として認知は進んでいないといえる。

SCC の管理及び運営は、学生・キャリア支援センター、学生・キャリア支援課、管理会社の三者によって行われている。また寮のルールや規則については、ホームページに掲載しているものは基本的な情報のみで、入寮が決まった者に対して「SCC ガイドブック」を送付している。このガイドブックには、規則、ルールが記載されているが、実際に生活をしながら理解を深めるものという位置づけである。オープンキャンパス等で、寮生と共に学生寮に関する質問を受けることがあるが、寮の管理システム・ルール・規則についての質問は多くはない。学生寮に対してイメージしているものは人によって異なり、実際に大学によって運営方法は様々である。

次に、SCC に関する情報媒体が、寮生活に役立ったかを尋ねた。その結果、ホームページの情報、印刷物については、それぞれ 52.9%、64.9% と半数以上が「とても役に立った」「まあまあ役に立った」と回答していた (Figure10-12)。2011 年と比べて、それぞれ 14.4 ポイント、11.1 ポイント上昇していた。印刷物に関しては A3 二つ折りのリーフレットを作成している。リーフレットは大学案内と一緒に配布しており、SCC の理念、学生支援プログラムの内容、大学のサポート体制、寮生組織、施設概要、諸経費が記載されている。情報発信のツールとして、概要についてはリーフレット、具体的な活動内容についてはホームページとそれぞれの機能を活かした情報発信を継続していく必要があるといえる。

オリエンテーションに関しては、毎年 4 月の第一週に、1,2 年生合同の寮生全体の行事として行っている。

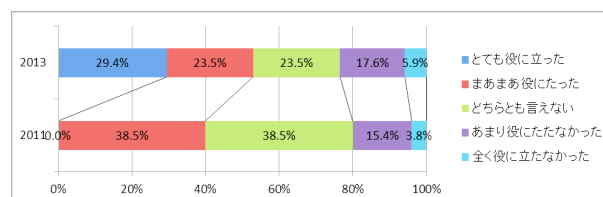


Figure10 ホームページの情報

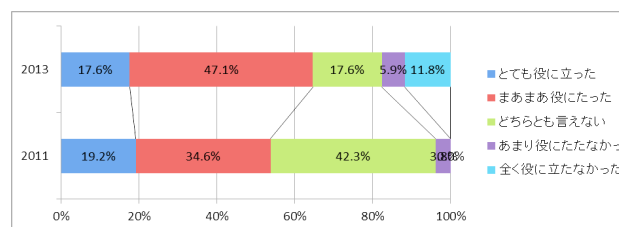


Figure11 印刷物 (リーフレット・ガイドブック等)

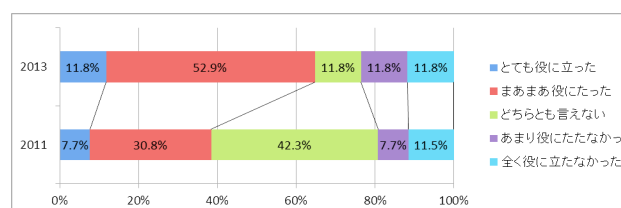


Figure12 入寮オリエンテーション

2013 年からは RA が司会を務め、内容についても寮生の視点から必要な情報を盛り込んでいる。2013 年では 64.7% が役に立ったと回答している。また 2014 年からは、入寮直後の不安を解消するべく、入寮日の夜に 1 年生が集まる場 (1 年生会) を設けている。これは寮生からの発案によるもので、1 年生同士の自己紹介や SCC での生活や行事について、RA 及び 2 年生に質問することができる。自由参加ではあったが、入寮日の 2 日間、新入生のほぼ全員が参加した。

施設・設備の満足度・要望

居室やハウスリビング内にある設備 (浴室、トイレ、キッチン、洗濯室)、大学院生が住む小石川寮との共有ラウンジの満足度について尋ねた。その結果、浴室、トイレ、ハウスリビング、キッチン、共有ラウンジに関しては、「大変満足」と「まあ満足」を合計した割合に大きな変化はないが、「大変満足」の割合が減り、「まあ満足」の割合が増えていることが示されている (Figure13-19)。

洗濯室に関しては、各ハウスに洗濯機と乾燥機が 1 台ずつ設置されている洗濯スペースを指しているが、満足度は 22.8 ポイント下降している。これらの管理 (使用時間やルール) については、ハウスごとに決めている。使用希望時間が重なる、前に使用した人の洗

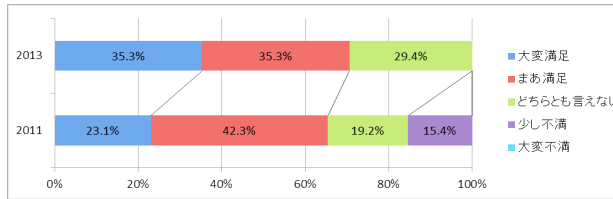


Figure13 居室全般 (広さ・明るさ・清潔さなど)

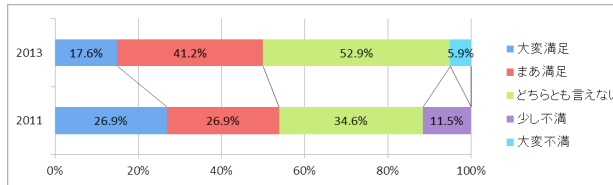


Figure14 浴室

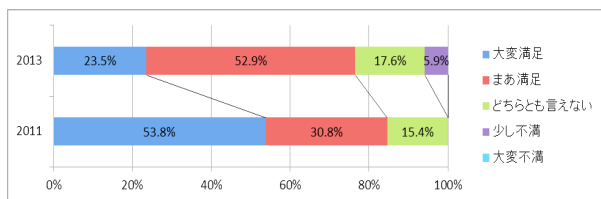


Figure15 トイレ

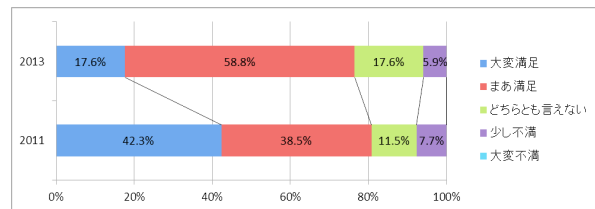


Figure16 ハウスリビング

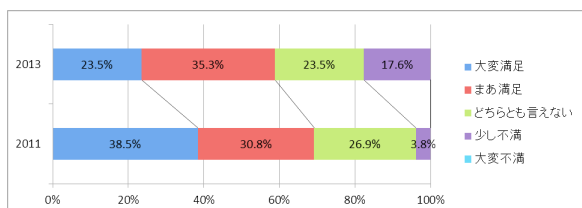


Figure17 キッチン

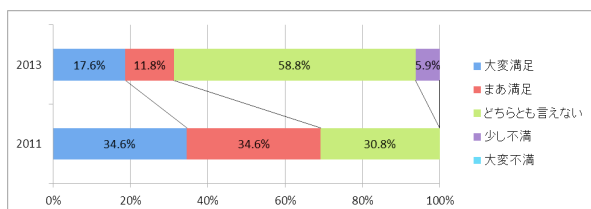


Figure18 洗濯室 (ハウスリビング内の洗濯スペース)

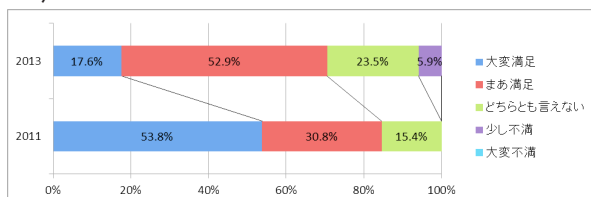


Figure19 共有ラウンジ

濯物が入ったままであるといった日常的な問題は往々に発生するため、それらの課題を話し合いで解決していくことが求められている。

寮費や寮の規則の認知度・満足度

寮費や寮の規則をどのくらい認知しているか、また満足しているかについて尋ねた。門限の規則、寮費の支払いに関する規則については、いずれも「充分知っている」「少しは知っている」の合計は 100%、82.3%、共有施設・設備の使用の規則、ゴミ処理の規則については、82.4%、82.2% と非常に高い割合で認知されていることが示された。2011 年と比べても、それぞれ 20 ポイント前後上昇している (Figure20-23)。

SCC は学部 1、2 年生を対象とし、定員 50 名と小規模な寮である。毎年定員の半数近くの約 20 名が入れ替わるため、規則の認知度を維持していくには、オリエンテーションやワークショップで告知するとともに、日頃から管理人室、寮生組織が連携して取り組む必要がある。

寮費、寮の規則についてのどのくらい満足しているかについては、寮費については 58.8%、寮の規則については、29.4% が満足していると回答があった。(Figure24,25)2011 年と比べて、それぞれ 10.4 ポイント、24.5 ポイント下降している。寮費に関しては不満と回答するものではなく、寮の規則に関しても割合としては少ない。

寮費に関しては月 30,000 円と、付近の相場の約 3 分の 1 の設定となっている。学部生用の寮である国際学生宿舎に比べると高い設定ではあるが、大学への近さ、家具・電化製品等の設備が備え付けであるため、満足度は高くなっていると思われる。

寮の運営機関の認知度・要望

寮の運営機関について、どのくらい認知しているか、学生・キャリア支援チーム (組織改編に伴い 2014 年 7 月より学生・キャリア支援課となる)、管理人、学寮アドバイザーについて尋ねた。学生・キャリア支援チームと管理人については 20% 前後が認知しており、2011 年と比べても大きな変化はない。学寮アドバイザーについては、76.4% が認知しており、2011 年に比べると 26.4 ポイント上昇している (Figure26-28)。

学生は寮の運営、すなわち学生寮を担当している教職員の担当業務まで、把握している者は少ない。その

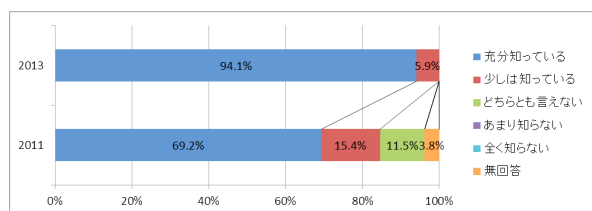


Figure20 門限の規則

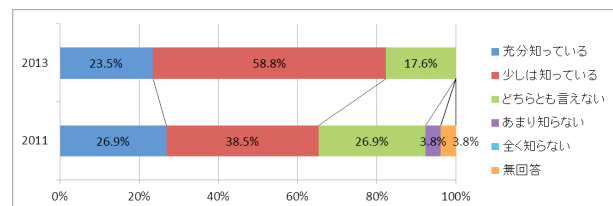


Figure21 寮費の支払いに関する規則

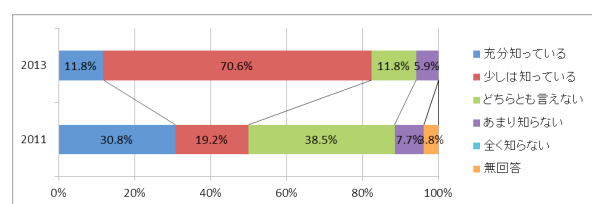


Figure22 共有施設・設備の使用の規則

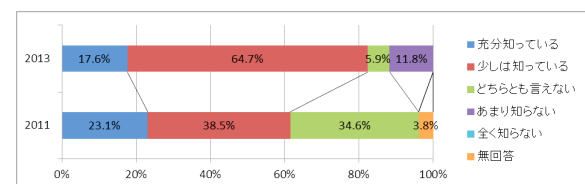


Figure23 ゴミ処理の規則

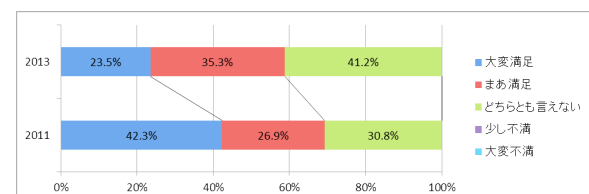


Figure24 寮費の満足度

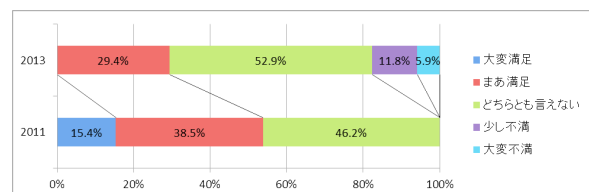


Figure25 寮の規則の満足度

ため、メールでの連絡が取りやすく、行事等で SCC に行く機会の多い学寮アドバイザー、毎日管理人室のある寮玄関で顔を合わせる管理人といった担当者が窓口となり、必要なサポートへつなぐことが求められている。

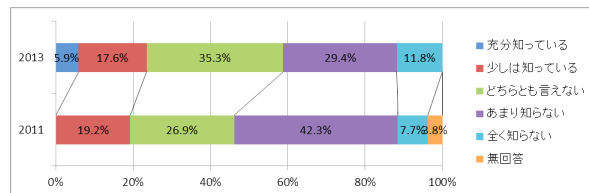


Figure26 学生・キャリア支援チーム

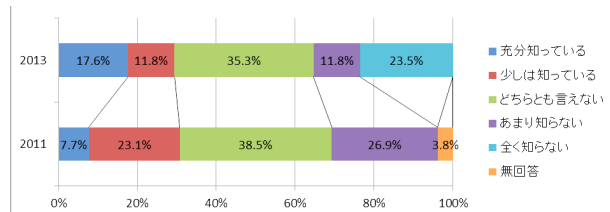


Figure27 管理人

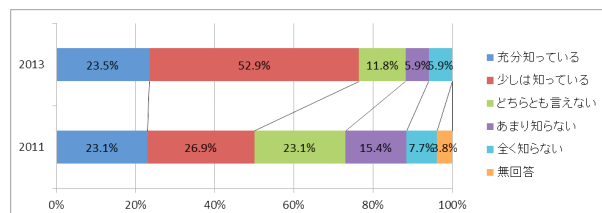


Figure28 学寮アドバイザー

寮内での非常時の対応の認知度

寮内での非常時の対応について、災害時、病気になった時について尋ねた。災害時の対応については 47.1% が認知しており、2011 年に比べると 39.4 ポイント上昇している (Figure29,30)。4 月には小石川寮との合同防災訓練を行っており、その際に避難経路の確認や消火活動の模擬を行っていることもあり、認知が広がったのではないかと考えられる。

病気になった時の対応については、53% が認知しており、2011 年に比べると 33.8 ポイント上昇している。SCC 内には看護設備はないので、病気になった場合は自分で医療機関にかかる必要がある。SCC ガイドブックには、医療機関の一覧が掲載されているが、まずは学内の保健管理センターを利用する寮生が多い。インフルエンザやノロウイルスといった感染症の場合は、ハウス内、寮内での拡散を防ぐ必要があり、知識として対処方法を身に付けておく必要がある。

寮内の対人関係

寮内での対人関係について、交流をどのくらい行っているかを尋ねた。「ハウスリビングなどの共有スペースで一緒に過ごす」については、「とてもある」「そこそこある」を合わせると 58.8% となり、2011 年に比べると 10.4 ポイント下降していた。「寮の行事やパーティーなどを一緒に楽しむ」については、66.1%

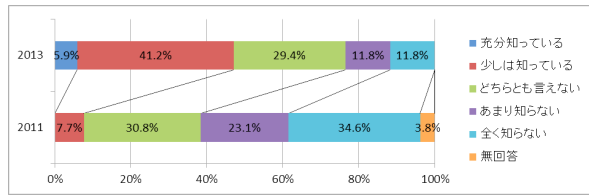


Figure29 災害時の対応

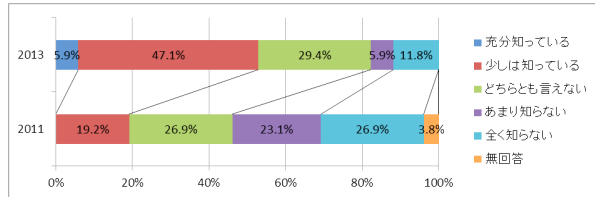


Figure30 病気になった時の対応

となり、2011 年に比べると 12.3 ポイント上昇していた (Figure31,32)。

寮内の対人関係、交流については、開寮当初より生活を共にするハウスマンメンバーとの交流はあるが、ハウスマンメンバー以外との交流が難しいという課題があった。ハウスマンメンバー以外と関わる機会として、学生支援プログラムでは、各々の委員会活動、寮全体の行事(学修プログラム・寮祭・ウェルカムパーティー、さよならパーティー)、自主企画委員会が主催する行事(年度によって異なるが、映画鑑賞会、七夕、カーヴィーダンスと朝食等)がある。ハウスリビングでの日常的な交流、寮の行事やパーティーへの参加については、ハウス長をはじめ 2 年生によるリードに頼る部分も大きい。1 年生は「自分が先輩にしてもらってうれしかったことを、自分が先輩になったときに、新入生にしてあげたい」と考える。2 年生自身が SCC で寮生活をするものの意義について理解を深め、実践していくことは、改善につながるのではないかと考えられる。

おわりに

最後に 2011 年と 2013 年に行った SCC 寮生を対象とした調査について、6 項目に分けて比較を行った結果について考察する。それぞれの項目についての回答傾向でいえば、「入寮前に SCC の情報の充足度」「寮の規則の認知度」「寮の運営機関の認知度・要望、寮内での非常時の対応の認知度」については、2011 年に比べて高い傾向にあった。反対に、「施設・設備の満足度」については、経年劣化に伴い開寮当時と同じ状態を維持するのは難しく、2011 年に比べ低下した。

以下にて、特筆すべきと思われる点を挙げていく。第一に「寮内の対人関係」については、ルームシェア

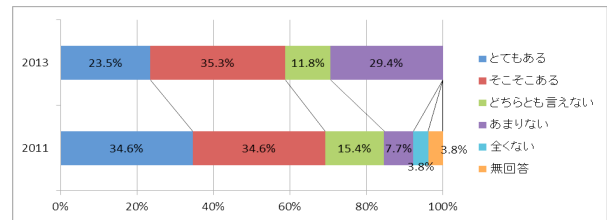


Figure31 ハウスリビングなどの共有スペースで一緒に過ごす

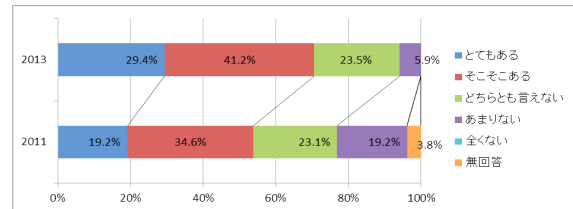


Figure32 寮の行事やパーティーなどを一緒に楽しむ

型のハウス、学生支援プログラムに沿って生活するだけでは、交流は生まれない。対人関係を促進していくには、一学年 22 名前後という少人数のため、誰もがリーダーシップをとり、チームでプロジェクトを回していくことを体験的に学ぶことができる環境であることを、寮生自身が認識していく必要がある。また、寮生の規範となる寮長、副寮長といった寮生組織の役職者、ハウス長といったリーダーとなる存在を育てていくことが求められる。

第二に、2011 年に行った調査で明らかになった SCC の課題として挙げられている、寮生の主体的な交流、寮内外の交流の促進、地域・社会への共生への発展(耳塚・桂,2013)については、レジデント・アシスタントの存在が、寮生の活動に継続性をもたらしていると考えられる。

寮生の主体的な交流は、年々寮生が企画する行事が増えており、好評だったものや、行事を通して寮生の交流が育まれるものは、継続して実施されている。また、寮生自身が行事の後、学期末、学年末には「ふりかえり」の機会を設け、PDCA サイクルを回していくことで、次の行事、次年度への活動への引き継ぎを円滑に行うようにしている。

地域・社会への共生への発展については、現状では学部オープンキャンパスでの寮紹介の企画や、他大学の学生寮視察といったものに留まっている。学生寮は住まいというプライベートな空間を持つため、安全への配慮から寮生以外が自由に入出入りするの難しい。開寮の時から、寮祭では地域の方をご招待しているが、このような活動を継続していくとともに、寮外での活動を模索していきたい。

近年、大学のグローバル化に伴う留学生の受け入れ、日本人学生のグローバル人材育成を目的とする国際寮、学生募集・獲得の観点や、学生寮の建物の老朽化に伴う立て直しの時期ということもあり、新規の学生寮の建設が増えている。新設の学生寮は設備面(=ハード)の新しさでは注目されるが、経年の劣化によりいつまでも設立当初の状態を保つのは難しく、満足度も低下する。一方で、寮内の学生支援プログラム(=ソフト)を充実させることで、学生寮における教育的支援が期待できると考えられる。

参考文献

桂瑠以 (2013)「学生寮調査報告 - 学生寮の生活環境及び人間関係に着目して -」『高等教育と学生支援 - お茶の水女子大学教育機構紀要 -』3 pp.30-42.

北澤泰子・望月由起・霜鳥美和 (2014)「学生寮におけるピアサポーターの成長に関する一考察 - お茶大 SCC のレジデント・アシスタントを事例として -」『高等教育と学生支援 - お茶の水女子大学教育機構紀要 -』5.

耳塚寛明・桂瑠以 (2013)「学生寮への教育的期待—お茶大 SCC の実践と課題—」『京都大学高等教育研究』19 pp.87-97.

望月由起 (2013)「人材育成のしくみとしての学生寮の活用」『Between』2013 年 8-9 月号 pp.24-25.

望月由起「学生寮の機能多様化と大学のストラテジー」(2013)『カレッジマネジメント』183/Nov.-Dec.2013 pp. 24-29.

お茶の水女子大学 学生・キャリア支援センター (2014)「統合型学生支援システムの構築による女子高等教育機会の保証」事業 最終報告書, お茶の水女子大学 学生・キャリア支援センター.

2015 年 2 月 5 日 受稿